

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 26 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370829

研究課題名(和文) 書誌調査にもとづく明代出版史上の転換期研究

研究課題名(英文) A Bibliographic Study of the Transition Stage of Ming Publication History

研究代表者

井上 進 (INOUE, Susumu)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：40168448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の基礎ないし根幹である明版書の調査については、この四年で約360点の原本閲覧と書誌収集を果たした。本研究開始以前に蓄積されていた書誌は2900部たらずであるから、新たに増加した分を併せれば、利用可能な書誌は3200部を優に超えるものとなる。このうち本研究において特に注力した台湾公蔵善本の調査結果については、解題つきの知見目録として整理しつつあり、その中の最も史料的価値の高い部分はすでに刊行を終えている。またこの刊行された目録の解題は、その多くが個別の版本に即しつつ明代出版史、特に明代中期における出版状況の変化に関する著者の見解を述べたものであって、単なる形態的書誌の記述なのではない。

研究成果の概要(英文)：For these 4 years, I have finished investigating about 360 original copies of the book printed in the Ming dynasty and collecting their bibliographies as for the base and nucleus of this study. Before I started this study, the number of previously accumulated bibliographies were almost 2900, therefore now there are more than 3200 available items by adding my latest achievement. Especially relating for the result of investigation of rare books owned by public institutions in Taiwan that I focused very much for these years, I have been compiling the catalogue with detailed comments, and have already published the most important and valuable part as historical sources. Furthermore, most of the comments in this catalogue is not only morphological descriptions but also expression of my opinion on the Ming publication history, especially the transition stage in the middle of Ming dynasty.

研究分野：中国近世文化史

キーワード：明代出版史 明版 目録学 書誌学

1. 研究開始当初の背景

明代出版史、ないし出版文化史の研究は、かつてはほとんど空白と言ってもよいような状態であったが、近年来はようやく状況が変化しはじめ、さらには欧米における読書史などからの刺激もあって、中国大陸や台湾の比較的若い世代の研究者によって、相当数の研究がなされるようになった。だがそうではあっても、それらの研究は概説風の平板なものか、あるいは考察の対象を個別の版本や特定の出版者などに絞った、ごく特殊な研究たるに止まっている場合がほとんどである。こうした現状は、必ずしも各研究者の能力に問題があるからではなく、研究の基礎である史料状況に問題があるためと言ってよいだろう。

そもそも明代出版史、ないし出版文化史を研究するというなら、その史料的基础は、まずなによりも膨大な量が現存している明版の書誌にこそ在るだろう。ところが明版書というのは、戦前の目録学、版本学においては、戯曲・小説とか一部の版画書などを除き、あまり真剣な考察の対象とはなっていなかった。さらにこうした状況は、戦後もかなりの期間継続し、その書誌研究は長く貧弱なままであったのだが、1980年代くらいになると、時間の経過とともに明版も次第に古版、善本の範疇に入るものが多くなりはじめ、かくてその書誌研究もようやく本格的に行なわれ始めた。

その成果の代表的なものとしては、戦中以来の研究成果をまとめた王重民『中国善本書提要』(上海古籍出版社、1983)をまず挙げることができ、ついで台湾の『国立中央図書館善本序跋集録』(同館・現国家図書館、1992~94)、『国家図書館善本書志初稿』(同館、1996~2000)、また沈津『美国哈伯大学燕京図書館中文善本書志』(上海辞書出版社、1999、同氏主編増補改訂版、広西師範大学出版社、2011)などが続き、さらに中国で国家事業として編纂された『中国古籍善本書目』(同書編纂委員会編、上海古籍出版社、1992~96)も、著録するところの大半が明版書であり、且つ大陸の公的機関が収蔵するものを網羅していることから、やはり明版書誌の研究にとって相当の参考価値をもつものと評価できよう。

ただしこれらの目録は、すべて中国大陸、台湾、米国の蔵書を対象として中国人が編纂したものであって、日本に現存する質、量ともに真に世界的な水準の明版書については、当然のことながらまったく注意が払われていない。またこれらの目録が現存明版書のどれほどを覆い得ているかと言えば、それは本当にごくわずかな部分だけである。王重民『提要』は、上記の諸目のうち明版書を著録すること最も多いものであるが、その著録数は同版の重複を含めて約2400部、明版書の版種全体から見れば、まず数パーセントでし

かないだろう。

しかも大陸に現存する明版書に関して言えば、研究史料として用い得るだけの詳細な書誌の公表が、近い将来に大きく進む、ということはほとんど期待できない。というのも大陸の蔵書機関は、善本の閲覧制限がきわめてきびしく、目録によってある本の存在、場合によってはある程度の概要を知っても、その現物を実際に閲覧し、自らの研究関心に即した書誌を存分に収集することは、ほとんど不可能と言ってよいのである。今までのところ、中国大陸の学者が行なう研究は、既存の目録、研究書、論文等に史料の根拠を求めていて、自らが行なった書誌調査による新知見というのは、実のところきわめて少ないのが通例であるが、それはもっぱら閲覧の困難のためと謂ってよい。

台湾の国家図書館(旧中央図書館)所蔵の明版書に関しては、上述の大型目録が公刊されていて、その書誌については相当詳しいところまで知ることが可能となっているが、『序跋集録』はむろん序跋を記録しただけのものであるし、『善本書志』は版本学的記述がその主たる内容である。つまり出版史、出版文化史の史料としてその書誌を用いようとするならば、やはり実物を自らの観点で調査することが必要となろう。またこれまでの経験によれば、上記国家図書館の目録には、多数の人が共同で編纂した大型の書物ゆえある程度はやむを得ないことながら、字句、標点の誤り、また正確を欠く記述が無視できぬほど存在してもいる。

さらに故宮博物院の蔵書については、ふつうの収蔵書目が備わっているだけで、図録等が特に作成された宋版など最善本を除き、明版書一般の書誌についてはほとんど明らかになっていない。結局、明代出版史、出版文化史の研究をより高い水準に押し上げるためには、まずその基礎たる書誌研究、特に日本に現存する明版書、および大陸よりはるかに開放度が高く、所定の手続きを踏めば大抵のものが閲覧可能な台湾公蔵明版書の閲覧、調査、書誌整理とその公表が必要となるわけである。

2. 研究の目的

上記のような背景の下で、報告者は十数年来一貫して明版の書誌調査を継続し、それによって得られた史料を利用しつつ、明代出版史、ないし出版文化史の研究に従事してきた。比較的最近の成果としては、『明清學術變遷史』(平凡社、2011)の第一部に収められている六篇の論文が、その代表的なものである。またこの間の調査によって、本研究開始以前に蓄積された明版書誌は2900点たらずにのぼり、質、量ともに相当の水準に達したのであるが、同時にその不足もようやく明らかになりはじめた。すなわち明代前半期の出版を実物に即して考察しようとするなら、国内蔵

本だけでは不十分で、どうしても台湾にある明版書の調査が必要だということである。

しかもこの明代前半期刊本の調査というのは、単に書誌収集の充実のためだけに行なわれるべきなのではない。明初の極端なまでに単調、貧弱な出版状況が、いかにして明末の豊富多彩を極めた、空前の繁栄へと変わっていくのか、その変遷の具体的な経緯、およびそのような変遷を導く論理の追究は、明代出版史の全体像解明の上で必須のことに違いないからである。

このような観点から、本研究では台湾に赴いての書誌調査の実施、および得られた書誌の整理、考察、知見目録化、公表が第一の課題となった。なおこのうちの調査については、必ずしも数量を一義とせず、質を重んずること、また国内における書誌調査はあくまで補完的なものとし、より多くの時間を知見目録化の作業に費やすこととした。このような方針を取ったのは、すでに蓄積されている書誌が約 2900 点という多数に上っており、今や問題は必ずしも量にないこと、またただでさえ整理が新たな史料の増加に追いつかない状況で、いたずらに量を追求しても整理の作業により大きな遅れをもたらすだけに終わりそうだったからである。

収集、整理された史料を用いての研究は、論文執筆や研究発表といった形式でもむろん行なうよう努めるものの、何よりもまず知見目録を著わすことを通じて、すなわち基本的書誌の外、主要な序跋や題識を節録、ないし必要に応じて全録し、さらに考証、解説をも加えた知見目録を著わすことを通じて行なうこととした。「背景」の項で述べたように、本研究は明代出版史研究をめぐる史料状況の改善に貢献しようとするものだからである。

3. 研究の方法

本研究の基礎ないし根幹をなすのは書誌調査であるが、そこに格別特殊、複雑な方法論といったものは存在しない。すなわち調査の中心たる台湾公蔵善本の調査については、毎年二回程度台北の故宮および国家図書館に赴き、主として未見の明代前半期刊本を閲覧し、その書誌資料を収集すること、またこれを補完するものとして、国内では国立公文書館、また静嘉堂文庫等に赴き、必要となった明版書誌資料を収集する、ということに尽きるわけである。

ただし一口に書誌資料収集とはいっても、得られる書誌が「明代出版史上の転換期」を研究する上でより有用な、系統的なものとなるよう注意し、無駄を省こうと努力することは当然である。よって台湾で閲覧する明版書は、明初の単調・貧弱な文化状況をよく反映する作品、また成化・弘治以降に至り、突然復刊されはじめる史学、文学の古典著作や諸子百家など正統以外の学説を伝えた明代中

期刊本、さらにはそれ自身が「出版史上の転換期」を体現していると言ってもよい明代中期の活版本のうち、日本に伝本がないか、あっても見ることの難しいものを優先的に選ぶ。ただし上に記した類の版本で、日本に同版があったとしても、意味のある異同があると推定されるものは調査の対象に加える。また日本国内における調査は、台湾で得られた書誌の意味をより深く理解するため、関連する版本や同類書などを選んで閲覧し、収集された書誌が総体としてより高い資料的価値をもつものとなるよう配慮する。なお台湾における書誌調査は、故宮においては一日五点程度、国家図書館では四点程度になるのがふつうである。両者の数が異なるのは、閲覧時間、および手続きにかかる時間の差によるもので、その結果月曜から金曜まで、三日を故宮に、二日を国家図書館に当てると、一週間で閲覧できる部数はだいたい二十余部程度となる。

ついで得られた書誌の整理、目録化であるが、すでに前項でも述べたように、これを行なうについては基本的書誌を記述する外、主要な序跋や題識を節録、ないし必要に応じて全録し、さらに考証、解説をも加えることが必要であり、当然ながらその作業量ははなはだ大きなものとなる。よって目録化を進めるに当たっては、まず入力稿を作成の上、東洋史専攻の学生、院生をアルバイトとして雇い、実際の入力作業に従事してもらうこととする。

4. 研究成果

本研究によって新たに収集された明版書誌は約 360 部で、うち台湾蔵本が 210 部、国内蔵本が 150 部ほどである。数量から言えば、一年平均 90 部の書誌収集というのは、本研究以前における調査の実績と比べかなり少ない数であるが、これは最初から意図したところであるし、またその質は極めて高い。さらに従前に収集されていたところと併せれば、累計で 3200 余部の書誌が蓄積されており、これは王重民『提要』の著録数 2400 部を三割以上上回る、はなはだ観るべき数だと謂えよう。

もっとも書誌の整理と目録化の方は、その作業量があまりに大きいため、それほど順調に進んでいないのであるが、台湾所見明版書誌のうちもっとも重要で、明代中期における出版の変化をよく表現しているものについては、下の第五項に記したとおり、経史子集各部に分けた選録の公表を果たした。なおこの選録によって公表しえた書誌は、紙幅の関係からして全体のごく一部に止まらざるを得なかったが、残りの部分についても編目の作業はかなり進んでおり、全体の七割以上はすでに著録をすませている。台湾所見書誌の全体を覆った目録稿は、日ならずして脱稿する予定で、その公刊も今後一年以内にできる

ものと見込んでいる。

なお国内所見分はと言うと、これはとにかく大量で、現在編目作業を終えているのは約1000部に止まる。よってそのすべてを目録化しようとするれば、必要となる作業量は膨大で、完成のめども容易には立たなくなるであろう。このため現在は、国内分については史料のあるいは文物的価値の高いものを選んで、部分的公表で満足しようと考えている。

以上のごとく、本研究が終了したばかりの現在、公表しえた書誌は台湾所見分の一部に止まっているが、やがて台湾所見分の全体、さらには国内所見のうち価値の高いものの公表が実現すれば、それは目下の明代出版史研究に存在する史料の困難の軽減に相当程度役立つものとなる。

このほか、本研究においては台北の故宮博物院・図書文献処と継続的な交流を実現させ、彼に所属する研究者との交流を深めることができたのであるが、これも重要な成果であった。この交流、協力関係は具体的な形にもなっており、下の第五項に記したとおり、招かれて彼の地で講演を行ったり、また院刊の雑誌に論文を掲載したりしたのであるし、そのことはまた、今後の研究にとって財産となるものであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

井上 進 「台北所見明版書選録 一(経部)」(『名古屋大学東洋史研究報告』38、査読有、2014、p.97~132)

井上 進 「観海堂蔵書点滴」(『故宮文物月刊』376、査読有、2014、p.28~35)

井上 進 「台北所見明版書選録 二(史部)」(『名古屋大学東洋史研究報告』39、査読有、2015、p.93~130)

井上 進 「版画書の来龍去脈」(『故宮文物月刊』389、査読有、2015、p.24~35)

井上 進 「台北所見明版書選録 三(子部)」(『名古屋大学東洋史研究報告』40、査読有、2016、p.103~140)

井上 進 「台北所見明版書選録 四(集

部)」(『名古屋大学東洋史研究報告』41、査読有、2017、p.153~190)

井上 進 「亭林集外詩文のことなど」(『颯風』55、査読なし、2016、p.34~62)

〔学会発表〕(計1件)

井上 進 「版画書の来龍去脈」台北・故宮博物院「明清版画工作坊(workshop)」專題演講、2015年7月28日、故宮博物院圖書文献大樓(台北・台湾)

〔図書〕(計1件)

井上 進 『明史選舉志1』(酒井恵子との共訳注、平凡社東洋文庫 839、2013、339頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

井上 進 (INOUE Susumu)
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号：40168448

(2)研究分担者

なし()

研究者番号：

(3)連携研究者
なし()

研究者番号：

(4)研究協力者
なし()